平和のために私ができること

一宮市立丹陽南小学校　六年　伊藤（いとう）　咲音（さきね）

昨年の冬休みに、私は「窓ぎわのトットちゃん」の映画を見に行った。私は作者の黒柳徹子さんが好きだ。なぜかというと私のひいおばあちゃんに似ているらしいのだ。ひいおばあちゃんは私が小さい頃に亡くなったが、明るくておしゃべりな、おもしろい人だったらしい。そして、黒柳さんと同じ昭和八年生まれでもある。そんな黒柳さんの映画が公開

されると知り、私は母にねだって連れて行ってもらった。

映画は黒柳さんが小学校の頃の話だった。時代はちがうが、今の私と同じように学校に行き、友達と遊ぶ楽しい日常を過ごしている。

しかし、話の途中から少しずつ周りの様子が変わっていった。戦争だ。駅からは男の駅員さんがいなくなり、女の駅員さんになったキャラメルの自動販売機は買えなくなり、学校へ持っていくお弁当は大豆をいったものに

コクヨ　ケ−10　20×20

なった。カラフルな色の洋服を着ていたお母さんは兵隊さんに地味な色の服を着ろと注意された。

そして、一番ショックだったのは町中にうでや足を失った兵隊さんがいたり、お骨を持って泣いている女の人が現れた事だ。最後には黒柳さんの家は屋根が赤いので空しゅうの目印になるためこわされ、小学校は空しゅうで燃えてしまった。町中の様子が戦争一色になったのだ。

私はこわくなった。黒柳さんも私と同じように楽しく生活している普通の小学生だったのに。少しずつ人々の生活や幸せをうばい、最後には全てを失わせるのが戦争なのだと思った。そして、その間にはたくさんの命が消えていっているのだ。その一人一人が誰かの大切な家族や友達だ。私はそんな辛い思いをする戦争は絶対にしたくない。

子どもの頃にこんな悲しい戦争を経験した黒柳さんは九十一才になった今も平和のため

に活動をしている。私は自分には何が出来るのだろうと考えた。

日本は今、すっかり平和に慣れてしまっている。当たり前の日常がずっと続くように感じてしまっている。しかし、戦争という悲しい歴史をしっかりと知り、忘れない事で平和を続けていけるのではないか。そのためには、戦争を体験した方の貴重な話を聞き、将来の私たちの子どもや孫たちに伝えていかなければならない。戦後七十九年となり、私たちが

戦争体験者の話を聞ける最後の世代になるだろう。日本でも傷ましい戦争をしたという事を伝えていかなければ、もしかしたら人々は戦争の悲さんさを忘れ、また同じように戦争を始めてしまうかもしれない。

日本は平和になったが、残念な事に今でも世界では戦争は行われている。でも、もう終わりにしたい。世界中の人が笑顔で平和な日常を送れる日が一日でも早く来るよう、私も自分に出来る事をしていこうと思う。